

【研究ノート】

私立高校入試問題英語科に見る指導要領

—私立高校は中学校指導要領（英語科）を理解しているか—

湊 史 郎

## 私立高校入試問題英語科に見る指導要領 ——私立高校は中学校指導要領（英語科）を理解しているか——

湊 史郎

Shiro MINATO

### 目次

1. はじめに
2. 中学校学習指導要領で言うコミュニケーション能力とは
3. A高校の入試問題
4. B高校の入試問題
5. C高校の入試問題
6. 私立高校の入試問題に望むこと

### [Abstract]

In this country, students who want to be high school students have to take an entrance examination. The entrance examination for public high schools is the same and is made by the Board of Education. However, all private high schools create their own entrance examinations. Have you ever seen such entrance examinations?

In this country, we use textbooks per the Course of Study published by the Ministry of Education, Science and Culture. Thus, entrance examinations have to be made in accordance with the Course of Study. This is what I want to ascertain. Are the entrance examinations of private high schools made per the Course of Study? Let's find out.

### 1 はじめに

小学校の新学習指導要領完全実施は2020年度からになる。中学校はその翌年の2021年、高等学校はさらにその翌年からである。しかしながら、実施前からの移行処置が認められているため、取り組みの早い学校では事実上の新指導要領に沿った授業がすでに行われている。

特に今回の改定では、中学校英語科での授業時間数に関する改定が無いので、移行処置の取り組みがしやすい。また、現行学習指導要領と新学習指導要領の双方で英語科の目標は「コミュニケーション能力を高める」こと

が大きな目標とされている。それで今までの指導を継続し、さらに高めるようにする形で、移行処置になりうる。その結果すでに多くの中学校では新学習指導要領を意識した授業が行われている。札幌市について言えば、ほぼ新学習指導要領にそっていると言ってもいいだろう。

現行学習指導要領と新学習指導要領の最大の違いは、従来の英語学習の目標が4領域の考え方から5領域の考え方へ変わった点である。すなわち、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の4つから「聞くこと」「読むこと」「話すこと・やりとり」「話すこと・発表」「書くこと」の5つに変

キーワード：学習指導要領  
Key words：course of study

わったことである。「話すこと」がSpoken InteractionとSpoken Productionの二つに分類されたのだ。前者は会話等で話者が頻繁に交代するため特に即興で話す力が必要とされる。後者は一定の時間一人で話し続ける場面が想定されているが、やはりその場に適した内容を話すということで、ここでも即興力が求められている。この考え方は今話題のCEFR Common European Framework of Reference for Languagesに沿うものである。

つまり、今まで以上に場面に沿った具体的なコミュニケーション能力の育成が求められているわけである。

ここで問題になるのがコミュニケーション能力の評価・評定方法である。中学校現場では、もうすでに様々な研究・検証がおこなわれており、各校の定期テストでもコミュニケーション能力の測定をねらった出題がなされている。そのような出題では、従来の文法知識を確認するタイプの問題形式とは大きく異なる形の問題形式になっている。また、採点においても、正答が一つではなく複数になることもあるなど、従来型とは大きく異なっていることが中学校教員の間では共通認識されている。

では、中学校を卒業した生徒たちが進学する高校、その入試問題ではその内容はどうなっているだろうか。生徒たちが中学校で身につけたコミュニケーション能力を、高校入試では的確に測定しているだろうか。それとも従来の文法知識に関する出題のままであろうか。

北海道の公立高校の入試問題については、様々な議論がなされているが、私立高校の入試問題に関する議論は皆無である。そこで今回は、北海道の私立高校から3校を無作為に選び、その英語入試問題を「コミュニケーション能力の測定」という観点から比較検討してみることにした。私立高校の入試問題であっ

ても、中学校英語教育の成果を適切に検証する入試問題になっていることを期待する。

## 2 中学校学習指導要領で言うコミュニケーション能力とは

まず最初に、中学校学習指導要領で言うところのコミュニケーション能力について確認しておく。言うまでもなく中学校教員は、指導要領に基づいて編纂された教科書を使って日常の授業をおこなっている。さらに指導効果を高めるために独自で作った教材も併用している。このことについては、現行の学習指導要領では<sup>(1)</sup>「教材は、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力を総合的に育成するため、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げるものとする。」と述べ、教材選定の理由がコミュニケーション能力の育成にあることを明示している。

中学校教員は、コミュニケーション能力を育成することが当然の目標と考えて、毎回の授業もそのための様々な方法を駆使しておこなっている。また、従来おこなわれていた英語文法指導に関しても、現行学習指導要領では<sup>(2)</sup>「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導すること」と記載してあり、英語の授業が文法指導のみで終るものではないことが明示されている。

これが新学習指導要領では<sup>(3)</sup>「文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、コミュニケーションの目的を達成する上での必要性や有用性を実感させた上でその知識を活用させたり、繰り返し使用することで当該文法事項の規則性や構造などについて気付きを促したりするなど、言語活動と効果的に関連付けて指導すること」と、さらに詳しく述べられている。単なる文法規則の指導ではなく、言語活動と一体化して指導するように等、指導方法にまで踏み込んだ書き方

をしているのである。よく誤解されるが文法指導が否定されているわけではない。コミュニケーション能力を育成するための活動を進めるためにも、その支えとなる文法知識は絶対必要だからである。

中学校における外国語指導の目標として、現行学習指導要領では<sup>(4)</sup>「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」と述べている。これが新学習指導要領では<sup>(5)</sup>「外国語によるコミュニケーションにおける見方、考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考え方を理解したり表現したり伝えあったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次の通り育成することを目指す、…」と書かれ、以下に「知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力の育成」「学びに向かう力・人間性の涵養」と続いている。

つまり、簡単に言うと、適切な「情報を理解する力」と「自己表現する力」の養成を言っているわけである。これが中学校で養成する「英語によるコミュニケーション能力」である。文法指導は、コミュニケーションをおこなう能力の基礎を作る要素の一つに過ぎないことがわかる。

中学校における英語のコミュニケーション能力とは、生徒の「日常生活」にはじまり、「社会的な話題」に関しても、生徒自身が理解や発表ができることを指す。

「聞くこと」に関しては概要や要点を聞き取る能力を指し、アナウンスやメッセージ、様々な話題から必要な情報を得て、適切に反応できることをさす。

「読むこと」に関してはあらすじや概要、要点を読み取る能力を指し、説明や物語を読んで情報を得て、適切に反応できることをさ

す。その際イラストや図表・グラフなどを参考にすることもある、

「話すこと」に関しては新指導要領では「発表」と「やりとり」にわけられているが、口頭で発表したり、相手と口頭で伝えあうことをさす。スピーチをしたり、質問に適切に回答や質問しかえしたりすることもある。

「書くこと」に関しては日常的な話題や社会的な話題について自分の考えや気持ちを適切に書いて伝えることができることをさす。メモや手紙、まとまりのある説明なども書くことができることになる。

中学3年間で生徒たちは、以上のような英語によるコミュニケーション能力を身につけるべく学習してきた。私立高校の入試問題がこの成果を適切に評価できる入試問題になっていることを期待する。

### 3 A校の入試問題

1番はリスニング問題である。リスニング形式の出題は、生徒の「聞くこと」を測定するには適切な出題形式である。A校の1番は3つのpartにわかれている。

Part1は「対話を聞きその内容に関する英語の質問に対する答えを、問題用紙の記述から選ぶ」という形態である。的確に聞き取っていなければ解答できない。これは「聞くこと」の問題としては適切である。

Part2は同じく「対話を聞いて、その対話の最後のセリフとして適切なものを解答用紙に書かれた4つの英文から選ぶ」という形態。聞いた内容が理解できなければ答えられないわけで、これも「聞くこと」の問題としては適切と言える。

Part3は、対話ではなく「英文を聞いて、その内容に関する質問に英語で答える」というもの。これも解答用紙に書かれた4つの英文から正答を選ぶ形態である。いずれも「聞くこと」の能力を測定する問題形式としては

適切と言える。

以上の1番のリスニング問題は「聞くこと」の測定としては適切に作られていると言えよう。いずれも内容に関する出題になっていることが評価される。これが単なる「音の違いを聞き取る」という形式であったなら、形ばかりのリスニングテストで、コミュニケーションとは無縁なものになってしまったことだろう。

2番は、問1と問2がある。

問1は「英文の空欄に入る適切な語を、解答用紙の4つから選ぶ」というもの。①～③までであるが、それぞれの文の内容には何ら関連はない。単に英文が並んでいるだけである。よくある問題形式で、コミュニケーションには程遠い。また、文法の観点から見ても、それぞれの文型に何ら関連はないので、文法知識を的確に測定しているかどうかは疑問であると言わざるを得ない

問2は「( ) 内の語を日本語の意味に合うように並べ替えなさい」という、これもよくある「語順の問題」である。これも①～③までであるが、問1同様まったく関連のない英文が並んでいるだけである。これもコミュニケーションとは言えない。

3番は長文問題である。対話形式になっている長文を読んで、後の質問に答えるというもの。問題は①～⑤までである。その中で、長文の内容に関する質問は①と⑤の2題のみ。①は内容に関する3つの質問に解答用紙に書かれた7つの語から正答を選ぶもの。⑤は本文の内容に関する英語の質問に、英語で書いて答えるもの。この⑤は「書くこと」の測定にもつながる。すなわち「読んで内容を理解する」が第一段階で、その「内容に関する質問に英語で書いて答える」という第二段階がある。コミュニケーション能力の測定としては、いい設問と言える。だが、②と③と④はどう見ても単なる文法問題で、長文の内容とは関係がない。語の変化や意味に関する知識

を確認しているだけで、わざわざこの長文を読む必要はないわけで、「長文を理解する能力」の測定とは言えない。この3番では、長文を読ませているのに、コミュニケーション能力とはほとんど関係ない出題が半分以上だと言わざるを得ない。

4番は本当の長文問題で、対話形式ではなく、約350語の英文を読んで、後の質問に答えるもの。問題は①～⑥までで、①と②は内容を理解しないと答えられない形態。しかし③と④は単なる文法問題で、この本文を読む必要はないものである。⑤は本文の内容についての出題で①と②同様本文の内容理解を前提とした問題。⑤はかろうじて、「内容理解」の範疇に入るが、正答を5つの英文から2つを選ぶという形式で、生徒の理解力を測定するのに適切とは言いがたい。生徒が適当に答えてしまうこともありそうである。また、⑥は本文の内容とは直接関係ない質問で、わざわざこの4番に含めている意図が理解しがたい。つまり、この4番の長文問題で「内容理解」に関するものは半分しかない。なぜ、長文を読む必要のない出題が、長文問題に含まれて出題されるのであろうか。不思議である。

結論として、A校の入試問題は、リスニング以外の全質問数の17題のうち、コミュニケーション能力の測定と言えるのは4題のみ。それもコミュニケーション能力の測定というには少々無理がある。結論としてこの入試問題では、リスニング問題以外では、コミュニケーション能力の測定は、ほとんど意識されていないと考えざるを得ない。

#### 4 B校の入試問題

B校の入試問題は1番から4番までであるが、記述問題だけでリスニングは無い。「話すこと」に関する出題は最初から無いので、「聞くこと」も放棄しているわけである。つまり「読むこと」と「書くこと」の二つの能力測



定しか設定していない入試問題ということである。

1番を見ると、問1から問3までにわかれている。問1には5つの会話文があり、それぞれの空欄に当てはまる英文を解答用紙から選ぶ形式。選択肢は4つずつある。内容を理解しないと選べない形になっており、一見「内容理解」の能力を測定する形になっているように見える。ただ、その5つの会話内容には、全く関連がない。それぞれが唐突で、どのような会話場面なのか、すぐに理解するのは難しい。

問2も会話文になっていて、(1)と(2)の2つの会話書かれている。問1同様に会話文の空欄に、解答用紙に書かれた4つの英文から正答を選び、会話が成立するようになるという形式。これらも場面設定には何ら言及がない。場面を無視して、会話を成立させろと言うわけで、コミュニケーションとは程遠い。

そして問3も会話文だが、問1と問2に比べれば長い会話になっている。でも問題形式は同じで、これも空欄に適する英文を選ぶ形になっている。つまり、すべてが「内容理解」の測定のような形になっているが、実態は単なる「選択問題」である。これで生徒の「英語を読んで理解する」力を正確に測定できるのだろうか。単なる文法知識問題とすれば、まだ納得できるのだが。

では2番を見てみよう。2番は問1から問4までであり問題数は12題。昔ながらの文法理解に関する出題だけで、語順並べ替えや適語補充の形態。それぞれの英文は唐突で内容に関する関連は皆無。コミュニケーション能力とは一切関係がない。だが、文法問題と割り切って出題されており、その意味からはすっきりしている。

3番は長文問題である。AとBの2つが出題されている。受験生に多くの英文を読ませようという出題者の姿勢が見られる。ここは

評価できるポイントである。

Aは約200語で書かれた英文に対して出題数は①～③までである。①と②は適語補充と文中の語の内容を問う問題。「内容理解」を意識しているのはわかるが、いずれも解答は選択式であり適切な「内容理解能力の測定」と言うには無理がある。③は内容に関する英問に英語で書いて答える問題。これは「内容理解」と「書く力」の測定を考えていると言えるだろう。その解答条件に「主語と動詞を含む英文で」とわざわざ注釈をつけているのも、適切な指示といえよう。

BはAとは異なる英語の長文を読んで、その内容に関する英問に英語で答える出題形式。問題は①～③までであり、最初の①と②は英問に対して、解答用紙に書かれた4つの英答から適切な答えを選択するもの。「内容理解」の測定としては少々弱いが、出題者が「内容理解能力の測定」を考えているのは理解できる。③は内容に対する英問に自作英語で答えるもの。これも「内容理解」と「書く力」の測定を狙っていると言える。ここはコミュニケーション能力の測定になっている。

4番は長い会話文。会話なのに20行にわたって続く。問題用紙のほぼ1ページを使っている。出題は問1から問6までである。

問1は文中の空欄に解答用紙にある前置詞を選んで書く形式。「内容理解」とは言えない。単なる文法知識問題である。

問2は文中の代名詞itが示す内容を答える問題。解答用紙に書かれた語句から選択する形式。かろうじて「内容理解」になっている。

問3は単なる和文英訳である。本文の内容を理解していなくても解答できる。

問4は適語補充で、解答用紙の4つの疑問詞から一つ選ぶもの。これも文法問題であり、本文の内容とは関係がない。問3と問4は、この長文問題で出題する必然性がないものと言わざるをえない。

問5は本文の内容にあう英文を解答用紙に

書かれた5文から2文を選ぶもの。「内容理解」の形式にはなっている。だが、5つの文から2つを選ぶというのは、生徒の内容理解が不十分でも正答になる可能性が高い。これはテストとして問題である。

そして最後の問6は、本文の内容を発展させるような英作問題。出題者のねらいは「英文を書く力」の測定であろうと推察されるが、解答用紙には主語と動詞まで書かれており、その4語に続けて書くという形式である。これでは「書く力」の測定と言うよりは誘導感が強い。コミュニケーション能力の測定と言うにはいささか無理があろう。

結論として40題の出題のうち、コミュニケーション能力の測定と言えるのは、甘く見て5題。出題者がコミュニケーション能力の測定を意識し、そのための出題を考えているだろうとは思える。だが全体としては従来の文法知識測定中心の考え方に影響され、コミュニケーション能力測定のテストとしては不十分なテストと言わざるをえない。さらに、リスニングテストが無いというのは、英語のテストとしては致命的であり、受験問題としては問題だと言わざるをえない。

## 5 C校の入試問題

C校の入試問題は1番から7番までである。これもB校同様リスニング問題は無かった。中学校の定期テストでリスニングは必須である。その「聞く力」の測定を最初から放棄しているのは残念である。

1番は長文問題である。ほぼ300字で書かれた英語の日記が2つ書かれている。日記の作者は別人だが、同じ旅をしたことが書かれている。長文問題としては珍しい設定である。出題者の「受験生に興味を持って長文を読ませたい」という意識を感じる。だがその後の問題には首をひねらざるを得ない。問題は問1から問8までである。

問1は文中にある名詞の単数形を複数形に書き直すもの。解答用紙にある4つの複数形から選択することになっている。この出題には問題点が二つある。一つは単なる文法問題であり、この日記文の内容には関係ないこと。もう一つは選択肢に書かれた英単語が極めて不適切だということ。

問2は文中のthe stationという語がどの駅を表すのか考えて駅名をこたえるもの。これも4つの選択肢から選ぶことになっている。これは、内容的確な理解を求めており、受験生の「内容理解力測定」には適切な出題といえる。

問3は英文の空欄に解答用紙から適語を選び記入する問題。英文の「内容理解」を前提としてはいるがいささか弱い。

問4は代名詞が表すものを解答用紙に書かれた4つの語句から選択するもの。これは「内容理解」を求めている。他の出題と比べると適切である。

問5と問6は文中の指示された動詞を文にあった形に書き換えるというもの。これは単なる文法問題というだけでなく、本文中に使い方を間違えた動詞が書かれているという大きな問題点がある。もちろんコミュニケーションとは一切関係ないし、わざわざ長文問題の中で出題する必要もない。

問7は、本文の内容に関する4つの英問に対して、英語で答える形式。正答は解答用紙に書かれた4つから選ぶ形になっている。適切な内容理解が求められる問題と言える。

問8は、問7同様に本文の内容理解を測定する問題。だが、英語で答えるのではなく内容を表す絵を見て適切な絵を選択する問題。他では見られない形式の出題でユニークである。コミュニケーション能力測定としても適切と言える。

2番は発音問題である。よくある英単語の一部に下線をひき、その部分の発音を問うもの。3番は単語のアクセント問題。第1アク

セントの位置を問うもの。2番と3番のような問題は、もはや通常の中学校の定期テストでも出題されることはほとんどない。学校で採択しているワークブック等でもまずみられることはない。つまり、中学校の授業ではほとんどおこなっていないことが出題されているわけであり、これは大きな問題点だと思われる。そもそも、この手の問題形式はその正答率が実際の発音・聞き取り能力とは関連が低く、単なる知識に過ぎないことが、20年も前に指摘されている。未だにこのような出題形式を選ぶこと自体が不思議である。

4番は英文の空所に適語を補充する問題で5題出題されている。完璧な文法問題であり、5題の英文には内容的に何ら関連はないし、問われている文法事項も動詞の形を問うものから、前置詞や副詞を選ぶものと、問う内容がバラバラであり、文法問題としても一貫性はない。

5番は5題出題されている。それぞれが一行ずつの対話文になっており、その一か所が空欄になっている。その空欄にあてはまる語を解答用紙から選ぶ問題。選択肢は各4つ。疑問詞を選ぶものや前置詞を選ぶもの等である。確かにそれぞれの英文の内容がわからなければ適切な答えは選べない。しかし、「内容理解」と言うにはかなり無理があろう。

6番は5番同様5題の出題で、バラバラに並べられた英単語を、添えられた日本語文に合うように並べ替えるもの。所謂「語順問題」である。これも、それぞれの文の内容や文型に関連はなく、単なる文法知識問題にすぎない。

最後の7番はほぼ1ページにわたって書かれた560語ほどの長文問題である。問題は問1から問8までである。問1は本文の地理上の場所を地図から選ぶ問題。問2は本文の内容を説明する日本語文を4つの中から選択する問題。単なる英文和訳ではなく、本文の内容がわかっていなければ答えられない問題。こ

れらは「内容理解」の問題として適切と考える。

問3は、文中の空欄にあてはまる語句を、解答用紙の4つから選択する問題。ストーリーの大意がわからなければ答えられない出題であり、これも「内容理解」の出題としては適切である。

一方、問4は文中の英単語1語を、別の英単語で置き換える問題。やはり4つの選択肢から選ぶ形式。これは「内容理解」のように見えるが、語彙力の確認としか言えない。つまりコミュニケーション能力の測定と言うには無理がある。

問5には、本文の内容の概略を日本語で書かれた文が出題されている。その一部が空欄になっており、解答用紙に書かれた4つの語から正答を選ぶ形式。「内容理解」を意識して作成された問題であろう。ただ、それぞれの選択肢に書かれた語がすべて「数字」であること理由は何か。ねらいがよくわからない問題である。

問6は、文中の空欄になったセリフ欄に適する語句を4つの選択肢から選ぶ問題。これが記述式なら「書くこと」の問題になっただろうが、そう言うにはこの形式ではいささか弱い。「内容理解」を要する問題という感じであるのだが。

問7は解答用紙に4つの英文が並んでいる。そこから「内容に合わないものを選び」という出題である。この出題は、中学校で教えた人間には違和感が大きい。出題者はこの設問を「内容理解」を計測する問題であると考えているだろう。確かに、内容を正確に理解していなければ、正答は選べない。だが、わざわざ内容に合わないものを選ばせる意味は何か。ひところ、「間違い探し」という出題形式がはやったことがある。それは長文問題等で使われている単語の中に、わざと綴りを間違えた語を書いておき、全体から「間違いを見つけよ」という出題がされることが多



かった。語学教育の観点から言うと、この形式には大きな問題があった。なぜなら、わざわざ間違えた単語を生徒に見せるのであり、しかも問題文であるので集中して見せることになる。正解がすぐにわかる生徒にはともかく、迷う生徒は長い時間にわたって間違えた語を見続けることになる。これは、間違いを定着させてしまう恐れがあった。そのような反省から、「間違い探し」的な出題は、最近は見なくなっていた。この問7が、何ゆえに「適当でないものを選べ」という出題になっているのか、理解に苦しむところである。

最後の問8である。これは3題あり、いずれも選択問題である。本文の内容に関する英語の質問に英語で答える形式である。所謂「英問英答」である。「内容理解」に関する出題であることがはっきりしていてわかりやすい。

C校の出題は、「内容理解」に関する問題が多く「読むこと」を意識して作られているのがわかる。しかし、すべてが選択問題であり、生徒が自ら書いて答える問題が一つもないことは残念である。また、単なる文法問題としても問題がある「発音問題」や「アクセント問題」等があるのは驚きであった。

想像するに、問題作成者はコミュニケーション能力の測定を意識していたのだろうが、問題作成チームの中に現代の中学校英語授業に疎いスタッフがいて、このような問題を作ってしまったのではなかろうか。

結論として、C高校の入試問題はコミュニケーション能力を測定しようという姿勢は感じられるものの、不十分だと言わざるを得ない。そもそもリスニング問題が無いというのが、英語科の試験としても片手落ちであろう。残念である。

## 6 私立高校の入試問題に望むこと

中学校の英語科授業では、「聞くこと」「読

むこと」「話すこと」「書くこと」のコミュニケーション能力を高めるために、様々な教材を用いて、様々な形の授業がおこなわれている。文法の指導はもちろんある。しかし、文法指導の後に、中学校教師はその文法を用いての「言語活動」「コミュニケーション活動」をおこなっている。そこでは「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の活動が統合的におこなわれている。コミュニケーション活動とは、統合的なものだからである。

そのような授業をすれば、当然その活動の評価が必要になる。そこで中学校教師は、多くの評価項目をたて、生徒たちがその活動を通してどのような力を得たかを測定しようとしている。当然のことながら、評価項目は膨大になるが、その結果が評定に現れるようになっていく。一昔前は、中学校の評定は、ほぼペーパーテストをもとに作成されていた。学校によってはテスト結果のみで評定を決めていた。しかしながら現代では、様々な活動の成果が表れるようになっていく。結果として評定を出すときに、ペーパーテストが占める割合は下がっており、テスト50%、平常点50%という学校もよく聞くようになってきた。さらに、そのテスト内容も、単なる文法問題ではなくコミュニケーション能力を測定できる問題が多くみられるようになっていく。ペーパーテストであっても、自分の考えを述べる場面もあり、採点基準も一定の幅があるようになってきている。そもそもテスト問題すべてが選択問題というのは、中学校ではありえない形である。

中学校の英語科授業は、10年前とは明らかに違う。さらに評価評定方法も異なる。定期テストの内容を見ても、単なる文法問題は著しく減少し、なおかつ新規の文法事項を用いての自己表現を要求するような出題が増えてきている。現代の中学生は、そのような授業を受け、そのようなテストを受験し、そのように評価されて卒業していくわけである。

その中学生たちが、卒業後の進路として進学する高等学校。その入学試験問題であるならば、中学校での学習成果を的確に測定するものであってほしい。もちろん、各学校によって選抜基準は異なるであろう。私立高校が、その入学生に対して希望・期待する能力や学力が様々であることもわかる。

それでも、まずは中学校英語科教育の成果を評価するという視点で入試問題を作成してほしいと思うのである。それは、中学校の英語科授業が、学習指導要領に従っておこなわれており、学習指導要領が示す目標に、中学校卒業時の生徒たちが到達しているかどうかを確認するものであってほしい。学習指導要領が示す英語科の目標は「コミュニケーション能力の育成」である。ならば、自動的に「受験生のコミュニケーション能力」を測定するものであるべきである。

今回の3校の入試問題を見てみると、英語によるコミュニケーション能力を測定するという観点からは、不十分感がぬぐえない。それはすなわち、出題者の中学校の学習指導要領の理解が不十分だということである。

そもそも、英語のコミュニケーション能力で「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の能力を測定するためには、ペーパーテストだけでは不十分である。「話すこと」は全く不可能であるし、「聞くこと」はリスニングテストを設けなければ測定できない。つまり、ペーパーテストだけでは、「読むこと」と「書くこと」しか測定できないわけである。さらに、テストの内容も「読むこと」を測定するためには「英文の理解力」を適切に測定するために、内容に関する設問の工夫が求められるのである。「書くこと」に関しては生徒の考えや気持ちを実際に書くような出題が求められる。答えを選択する形式だけでは「書く力」を測定することはできない。

もう一つ付け加えると、この3校の入試問題では全く触れられていないことがある。そ

れは異文化理解の観点である。現行学習指導要領では指導計画作成と内容の取扱いにおいて<sup>(6)</sup>「イ 外国や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと

ウ 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと」と記載されている。そもそもコミュニケーション能力育成の目的は、ここにある。

現在の中学校の英語科授業では、授業を通しての異文化理解の工夫が多々見られる。英語科の授業というのは、もはや単なる language class ではなく、もっと広い、異文化を理解するために英語を用いる class へと変わりつつある。実際に中学校の定期テスト問題では、異文化に関する出題もよく見られるようになってきている。

私立高校の入試問題作成者には、現在の中学校の授業内容を確認するとともに、今一度学習指導要領が言う「コミュニケーション能力」を理解し、その能力を適切に判断できるような入試問題の作成をするように希望する。

〔注〕

- (1) 中学校学習指導要領第9節  
平成20年3月告示
- (2) 中学校学習指導要領第9節  
平成20年3月告示
- (3) 中学校学習指導要領第9節  
平成29年3月告示
- (4) 中学校学習指導要領第9節  
平成20年3月告示
- (5) 中学校学習指導要領第9節  
平成29年3月告示
- (6) 中学校学習指導要領第9節  
平成20年3月告示

〔参考文献〕

- ・高木展郎「評価が変わる，授業を変える」2019  
三省堂
- ・陰山英男，藤岡頼光「これからの英語教育」  
2019中村堂
- ・根岸雅史「テストが導く英語教育改革」2017三  
省堂